

第73回 西日本国語国文学会 発表要旨

《講演》

原爆文学とその研究の現在

長野 秀樹（元長崎純心大学教授）

戦後七八年が経過して、この間に長崎原爆をめぐる言説も時間の経過と共に、変化してきた。戦後すぐに、長崎原爆のイメージを決定づけたのは永井隆の「長崎の鐘」（一九四九年）を始めとする一連の作品である。これに対し、地元長崎から、終始、批判を続けたのが山田かんである。山田は永井の作品が、後に「浦上燔祭説」（高橋眞司）と名付けられる論理に基づいていることを早くから指摘すると共に、そうした、永井を長崎原爆を代表するかのよに受け入れてきた、長崎の戦後状況へも厳しい批判を続けた。

一方「時を曳く」で一九七一年下半期の芥川賞候補となった後藤みな子、一九七五年上半期芥川賞を「祭りの場」で受賞した林京子などの作家や、井上光晴、佐多稲子など長崎にゆかりのある作家、青来有一（「聖水」二〇〇〇年下半期芥川賞受賞）のように、直接被爆体験を持たない作家も長崎原爆を題材に作品を発表し続けている。

また、研究者の側からは、二〇〇一年に西日本在住の近代文学研究者を中心に「原爆研究会」が結成され、研究会と研究誌の刊行を続けてきた。この間、二〇一一年三月に東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故がおこり、原爆に限定せずに、核文学として研究対象を広げながら、二〇二三年一二月の研究会は第七〇回となる。

実作と研究、二つの視点から、この七八年間を検証したい。

民衆キリシタンにおける実像のキリスト教理解

宮崎 賢太郎（元長崎純心大学教授）

従来の日本キリシタン史の定説は「日本にキリシタンが伝来すると、短期間に多数の日本人がキリシタンに改宗し、急速なキリシタン勢力の伸張に危機感を抱いた江戸幕府は、厳しい弾圧政策をとった。その後、信徒たちは潜伏キリシタンとして、迫害にも屈することなく、仏教徒を装いながら命がけで幕末まで信仰を守り通した」というものである。「長崎と天草

地方の潜伏キリシタン関連遺産」の世界遺産登録は、まさにこの定説をコンセプトとして構築されたものである。

話者は、四〇年余りにおよぶ、現存する長崎県下のカクレキリシタンの調査研究を主たる手がかりとして、日本人、ことに大多数を占める一般民衆層のキリスト教理解と、その受容のありのままの姿を追求してきた。江戸時代の潜伏キリシタンや、明治以降現代にいたるカクレキリシタンたちが信じてきたのはキリストやマリアなどではなかった。従来の夢とロマンに満ちた、悲しい迫害と殉教のキリシタン史の幻想のベールを取り去り、その実像とはいかなるものであったのかを問い直してみたい。

《招待発表》

近代日本の文学作品における「弔」と「吊」の使用

山下 真里（熊本大学）

現代では、「弔」は「とむらう」、「吊」は「つる」という意味であり、別字とされる。しかし、明治時代には「吊」が「とむらう」という意味で使用される例が多く見られる。また、1903年『漢和大字典』では「弔」が正字、「吊」が俗字で、両者は別字とはされていない。それでは、「弔」と「吊」はどのような過程を経て現代のように別字となったのだろうか。本発表では「弔」と「吊」が別字となった過程について、文学作品を対象とした調査を中心に明らかにする。

調査対象の資料は、六名の作家（樋口一葉、尾崎紅葉、夏目漱石、森鷗外、徳田秋声、幸田露伴）による作品で、1915年までに刊行され、国立国会図書館デジタルコレクションに見られるものである。それらについて「弔」「吊」の使用例を収集し、その字が「とむらう」意と「つる」意のどちらで使用されているかを調査した。その結果、おおむね1900年以前に刊行された資料では「とむらう」意でも「つる」意でも「吊」字が使用されていたこと、1900年以降の資料では「とむらう」意では「弔」字の使用が増加するものの、「つる」意では「吊」字の使用が継続することが明らかになった。同様の過程は山下（2023 予定）で行った、読売新聞における調査結果にも見られることから、このような過程を経て「弔」と「吊」は別字になったのではないかと考えた。

八代市立博物館蔵『八代名所集』をめぐる諸問題

真島 望（熊本県立大学）

熊本県八代やつしろ市立博物館蔵『八代名所集』は、寛文12年（1672）の序文を有する、八代の名所を題として諸家の発句を集めた名所句集である。『俳文学大辞典』（角川書店、1995年10月）には立項がなされ、地元の有志によって翻刻と最小限の注釈が行われているものの、「国書データベース」（国文学研究資料館）には未搭載で、周知されているとはいえない。上巻のみの零本であるため、詳細は不明ながら、おそらく熊本ないし八代における出版物で、近世前期の地方俳書として貴重であるだけでなく、地方の名所のみを題とした俳諧撰集としてもごく初期の例とすることができ、非常に重要な存在と位置付けられよう。

また、本文中には、題となっている名所・旧跡についての由来・沿革を記した漢文体の地誌的記述がしばしば見られる。これは編者と目される菅宇（八代在の俳人）の手になるもので、序文によれば、俳書としては異例だが、名所を詠ずる際に資するものとして施したという。これは近世地誌と俳諧・俳人の関係を考える上でも重要な素材となり得る。

本発表では、この、名所句集あるいは地誌として重要な位置を占めるとされる『八代名所集』について、同じく熊本の名所句集たる『阿蘇名所集』（元禄3年〈1690〉刊）も視野に入れつつ、これまでなされていない書誌学的な検討を行い、同時期の他地方の名所句集や地誌とも比較して、その存在意義について明らかにしたい。

《研究発表》

副詞「道理で」の成立

古田 龍啓（九州大学学術研究員）

本発表では副詞「道理で」の成立過程を明らかにする。現代語の「道理で」は「原因や理由がわかって納得するさま」（明鏡国語辞典第3版）を表し、「直前に判明した事実がそれまでに思っていたことと整合的に関係づけられ、納得した」意を示す「と思った」と共起しやすいという特徴を持つ（日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』くろしお出版）。

「道理で」は、抄物資料を中心に17世紀に約30例が現れる。専ら文頭で用いられ、先行文と「道理で」に後続する文が、原因・理由の関係に立つことを表す。半数以上が地の文

相当の抄物の注釈文に現れ、会話文（心内文を含む）の例は乏しい。

他方、18世紀以降は会話文にしか現れない。新たに「と思った」と共起する例が現れ、17世紀には少なかった、先行文が直前に判明した事実を表し、現代語同様に「納得感」を伴うと解釈できる例が大勢を占める。

「道理で」は、「チリツモツテ山トナル道理デ」（詩学大成抄）のように、節を受け接続部で用いられる「道理で」の存在を背景に、文頭に立つようになった。当初は、原因・理由を表す順接の接続機能を有していたが、18世紀に入り、納得の意を表す文末形式と共起するうちに、両者の間に呼応関係が結ばれ、「納得感」を伴う場合へと使用場面を狭めた結果、原因・理由がわかり、納得するさまを表す副詞となった。

悉曇学の「清」と「濁」

蛭沼 芽衣（九州大学）

悉曇学とは、仏教経典の原語であるサンスクリット（梵語）に関する学問である。とはいえ、実際は梵字の注音漢字が対象となり、梵字や対注漢字のヨミに仮託して、次第に日本語の観察もおこなわれていく。悉曇学が言語研究である以上、日本語研究に及ぼした影響は看過できない。本発表では、「清」「濁」という術語を中心に、悉曇学で発音をどのように分類していたのかをみていく。「清音」「濁音」を発音の、特に頭子音の区別のための術語にしたのは中国の等韻学である。国語学も悉曇学もこの用語を引いているのだが、それぞれの音韻体系が異なるため、「清」「濁」の意味が完全に等価とはならない。

日本語音に対する「清」「濁」のとらえ方として、古いものは『金光明最勝王経音義』が有名である。カサタハ行を「清濁不定」、それ以外の行を「清濁定音」としており、現代における認識とほとんど異ならない。一方、悉曇学で「清」「濁」という語が指す音は、研究対象や師伝、時代ごとに異なる。等韻学のそれと同じもの、梵語（とその対注漢字）理解のためのもの、独自の観察によるものがある。特に独自の観察が示すものは興味深く、さらにこの観察の記述が仮名をもちいておこなわれる部分は注目に値する。直接的な日本語の観察ではなく、その奥にある梵音の分類ではあるものの、仮名の範囲内だけで考察しており、結果的に日本語音を観察したもののようにもみえる。そこには、「清濁」という二項対立以上のものがあり、当時の音の認識のしかたを知る手掛かりとなる。

『栄花物語』における為平親王立太子問題：古活字本本文に注目して

二宮 愛理（九州共立大学）

『栄花物語』には、いわゆる「安和の変」に関わる記述がある。先行研究では、物語としての読解よりも、その記述を歴史的事実と照らし合わせる考察がなされている。一方、文学として読解することにおいては『大鏡』の方が注目されており、『栄花物語』の「安和の変」周辺を文学として読解する研究はほとんどない。そこで、本発表では、「安和の変」のきっかけともなった「為平親王立太子問題」の記述について、『栄花物語』における本文異同、史実との年次のずれ、ストーリー展開に注目し、物語としての読解を試みる。

まず、これまで解釈が定まっていなかった一節、為平親王が立太子争いに敗れた後の、為平の舅である源高明の心中表現に注目する。古活字本系統の本文異同に注目し、「さ」「かく」といった指示語が示すものと解釈を再考する。

次に、為平親王の元服と結婚に関する年次のずれに注目する。『栄花物語』では、為平親王の元服と結婚が史実に比べて早く設定されており、祖父の藤原師輔や母の中宮安子がともに健在である時期のこととなっているが、このことが物語にどういった影響を及ぼしているかを検討する。

これらを踏まえ、為平親王、守平親王（円融帝）の兄弟間での東宮争いについて、村上帝や藤原氏の動きに注目しつつ『栄花物語』の記述を追う。『大鏡』では「御をちたち」による「非道」によって、弟の守平親王に帝位を奪われたとされているが、『栄花物語』ではこの立太子争いをどのように見ているのかを分析する。

『我が身にたどる姫君』『恋路ゆかしき大将』における「癖」と「本性」についての一考察 — 『源氏物語』変奏の一端として—

小松 明日佳（広島女学院大学）

中世王朝物語と呼ばれる鎌倉期を中心とした物語群は、『源氏物語』の垂流として低い評価を受けてきたが、近年は『源氏物語』の大きな影響下にあることを認めた上での再評価がなされている。個別の作品について考察される一方で、大槻修（「はかなげな女の悲恋の物語」『中世王朝物語の研究』、世界思想社、1993）や金光桂子（「中世王朝物語における物の怪一六条御息所を起点として—」『中世の王朝物語 享受と創造』、臨川書店、2017）などによる複数の作品に跨った考察もある。後者の考察は、物語群全体を把握することに繋がり、

中世期の王朝物語とはどのようなものかという問いに答え、中世という時代を捉え直すことにも繋がると考える。

『源氏物語』における「癖」と「本性」が、光源氏の相反する二つの性質を象徴的に表したものであるということは、つとに秋山虔（「好色人と生活者—光源氏の「癖」」『王朝の文学空間』、東京大学出版会、1984）によって指摘されている。本発表では、「癖」と「本性」という表現が使われる、中世王朝物語に属する『我が身にたどる姫君』『恋路ゆかしき大将』という二作品を考察することで、二作品におけるこれらの表現が『源氏物語』を変奏したものであるか、そうであるならばどのような人物を造型するために用いられているのかを明らかにすることを目指す。そしてそれを、中世王朝物語全体へと展開させる足掛かりとする。

弱者に寄り添う —一色次郎文学の基層について—

鈴木 優作（鹿児島大学）

本発表では、一色次郎の文学における〈弱者に寄り添う〉という基層について論じる。一色は、「冬の旅」（『三田文学』1949.8）および『孤雁』（河出書房新社、1961.3）で二度の直木賞候補となり、「青幻記」（『展望』1967.8）で太宰治賞を受賞するなど存命中に活躍した作家であるにもかかわらず現在顧みられることが少ない。また、これまでの一色をめぐる言説は、結核による母の死を扱った「青幻記」と父の冤罪を扱った『太陽と鎖』（河出書房、1964.5）に集中しており、私小説作家とみなされる向きが強い。しかし本発表では、父母の死を創作の源泉と位置づけつつも、一色文学にはその個人的な体験を公的な問題意識へ昇華していった足跡が見出されることを指摘し、この問題意識が〈弱者に寄り添う〉意識であることを論じる。さらに、優生思想に基づく断種を主題とした「土砂降り」（『三田文学』1951.11）や、カスリーン台風の被災者を描いた「下流から下流へ」（『中央公論』1953.8）、鹿児島島嶼部に対する本土からの抑圧を扱った「離島の狂気」（『現代の眼』1971.10）、死刑制度を扱った「魔性」（『野性時代』1978.7）など、病者や被差別者、社会的弱者に焦点を当てた作品が数多いことを指摘する。以上の考察から、一色文学の基層には、受刑者や病者・マイノリティといった〈弱者に寄り添う〉まなざしがあることを指摘する。